

組織的調査研究活動推進事業 (尻屋地区)

佐藤 敦・須川 人志・宝多 森夫・伊藤 進
小川 弘毅⁽¹⁾・佐々木鉄郎⁽²⁾・苔米地昭一⁽³⁾

I 調査の目的

尻屋地区の漁業生産の活発化と安定を図ることを目的として、主として磯根漁場の管理・開発のあり方と、これに必要な調査研究などについて、地元より要望事項・意見を聴取し、これをもととしてその解決策を見出す。

II 調査方法

- (1) 調査期間 昭和56年4月～昭和57年3月
- (2) 調査地域 下北郡東通村、尻屋地区
- (3) 調査組織 調整組織：漁政課長・水産課長・振興課長・水産増殖センター所長
活動チーム：水産増殖センター・むつ地方水産業改良普及所
協力機関：むつ市役所・尻屋漁業協同組合・尻屋漁業研究会
- (4) 会議
 - (イ) 第1回調整会議 昭和56年9月28日
活動チームの編成・活動方針の決定
 - (ロ) 活動計画作成会議 昭和56年11月10日
活動計画の作成
 - (ハ) 第1回現地協議会 昭和56年11月10日
活動内容説明・問題点の抽出
 - (ニ) 第2回調整会議 昭和56年2月3日
問題点に対する対応方法についての県の方針検討
 - (ヒ) 第2回現地協議会 昭和57年2月8日
県の方針説明・対応方法についての総合方針決定
 - (ヘ) 東北ブロック会議 昭和57年3月3日
上記に対する国の指導

(1).....水産部振興課

(2)、(3).....むつ地方水産業改良普及所

Ⅲ 調 査 結 果

(A) 漁 業 実 態 調 査

既往資料および聞きとり調査により先ず漁業の実態を調査した。

(1) 活動地域の概況

本州の最北端にある「尻屋崎」の灯台から4 kmほど南に尻屋の部落が存在する。ここはまた下北半島の中心地むつ市より32 kmのところにある総戸数 200 戸（旧部落40戸、日鉄社宅160戸）の寒村である。

部落は尻屋漁港周辺に古くから成立した自然集落と日鉄社宅群が少し離れて立地し、小、中学校もそれぞれの中間に位置し、旧部落と日鉄社宅とに地域社会そのものが2分されている。

旧部落は漁業が中心であるが畜産、林業、農業も行ない、国定公園の尻屋崎は共有地で寒馬40頭を放牧、観光客は夏に1日500人程度訪れるところである。

(2) 地域社会の特色

大正時代に尻屋崎付近で座礁した日本海軍の特務艦の艦長が、同部落の磯物の採取と配分方法を見て、尻屋地先を「共産部落」と報じたことにより、この名称が有名になったが、これは多分にゆきすぎた表現と考えられる。

しかし、明治時代に当時の郡長が尻屋の若者を励ます意味で、何事にも勤勉であるようにと云うことで、「三余会」という組織を作り、共有山林の監視、磯漁業の監督指揮、祭典執行の主役を勤めるばかりでなく、部落の共同作業の下請にも当らせていた。年令は16才～42才までの男子で、現在でもその会および精神が歴然と残っている。例えば沿岸漁場およびその資源の保全に対する考え方は徹底しており、アワビ等の採捕は総べて共同で行ない、その収益は平等に分配されている。潜水の資格も研究会員全員（38人）に修得させ、何事も共同で成し遂げる習慣があり、後継者養成には非常に熱心である。

この様に自然条件が非常にきびしく孤立した尻屋であるが、最涯ての地で生きてゆくための知恵として、勤勉かつ運命共同体的な考え方が発達したものと考えられ、出稼者の全くない部落となっている。

(3) 漁 業 の 現 状

漁場は津軽海峡と太平洋に面し12 kmの海岸線を有し、一部に砂浜地帯がある外は大部分が岩盤または転石地帯となっている。沖合にはアタカ島、岸島、フタツ岩など大、小多数の海面から突出した岩盤性の小島がある。低潮線下の海底もまた岩盤、転石地帯が多く起伏にとみ、いたるところに瀬がありアワビ、ウニ、ホヤ、ワカメなどの資源に恵まれている。

なお、尻屋崎沖の沿岸3～5マイルにかけてはイカ、サバの好漁場となり、青森県の沖合底曳き船や全国のサバ巻き網船と地元の沿岸イカ釣り漁船が競合し漁業紛争をおこしている。

尻屋の漁業は表-1に示すように周年操業の形態がとられている。

また尻屋漁協における過去8年間の漁業生産量及び金額を表-2に示した。

スルメイカ漁の好、不漁は年間の総生産量に大きな影響を与えている。昭和49年より光力利用によるイカナゴ棒受網漁業が導入され期待された漁業であったが、昭和53年頃より急激に減少

し、漁業者にとっては大きな不安材料となっている。昭和54年より初めてサケの定置網が設置され、昭和54年には22トン、昭和55年には78トンの水揚げを行っており、期待される新漁業となっている。

表－1 漁業種類別、月別、操業状況（昭和55年度）

漁業種類	操業期間											
	1月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
タコ延縄漁業	←										→	
刺網漁業		→			→				→			
ウニ底曳網漁業		→	→	→								
イカ釣漁業							→	→				
コウナコ棒受網漁業				→	→	→						
一本釣漁業	→											→
採草漁業	→					→						→
採貝漁業	→						→				→	
小型定置網漁業	→								→			
その他				→				→				

表－2 尻屋漁協における漁業生産量の推移

区分	種類別	年度別		47		48		49	
		数	量	金	額	数	量	金	額
鮮魚類	イカ	112,980		11,102,820		2,925		291,020	
	タコ	13,427		2,388,695		67,121		11,915,640	
	マサリイカ	1,025		503,241		1,377		770,368	
	サケ(定)					6,751		2,437,140	
	ク(刺)								
	その他	2,703		928,105		16,300		4,166,266	
	計	130,135		14,922,861		94,474		19,580,434	
貝類	アワビ(成)	9,106		15,482,070		9,840		19,990,172	
	ク(稚)	15,300		7,686,940		13,166		10,857,150	
	計	24,406		23,169,010		23,006		30,847,322	
海藻類	生ワカメ	34,307		1,495,905					
	生フノリ	4,238		2,307,403		6,007		3,396,839	
	その他	1,324		557,619		5,229		1,011,411	
	計	38,869		4,360,927		11,236		4,408,250	
製品類	干フノリ	12,889		11,729,445		16,410		13,623,710	
	干ワカメ	9,200		3,626,780		7,404		6,908,634	
	イカナゴ								
	計	22,089		15,356,225		23,814		20,532,344	
その他	カラ付ウニ							2,059	
	塩ウニ	2,498		9,364,373		1,966		7,864,365	
		1,254		3,764,457		1,977		7,924,897	
	計	3,752		13,128,830		3,943		15,789,262	
合計		220,251		70,937,853		156,473		91,157,612	

過去3年間における水揚げ額の割合を表-3を見ると、アワビが40%程度で最も高い値を示している。昭和55年度鮮魚類が大幅に増加したのはスルメイカの豊漁によるものである。

操 業 隻 数 (最 盛 期)					備 考
無 動 力 船	0 ～ 3 トン	3 ～ 5 トン	5 ～ 10 トン	計	
	12	26	1	39	ミズダコ
40	12			52	サケ主体
	11	16		27	
	12	26	1	39	
	4	20	1	25	地先5～6mのところ
	12	26	1	39	マス、ソイ、ヒラメ、スズキ、メヌケ
					フノリ、イワノリ、マツモ
65				65	アワビ
			1	1	21名で共同 サケ
					イソウニ

50	51		52		53		54	
金 額	数 量	金 額	数 量	金 額	数 量	金 額	数 量	金 額
11,552,394	3,455	961,800	37,452	33,169,650	27,387	17,006,420	40,667	27,589,921
10,753,035	47,764	17,118,321	20,259	6,365,565	40,087	9,787,074	16,507	6,330,397
1,146,727	249	169,436	4,562	4,544,077	10,244	11,283,501	6,093	8,290,908
					144	79,680	70	81,800
							19,145	10,747,570
							3,012	1,882,701
7,885,358	12,556	10,394,300	9,607	4,900,810	15,112	10,815,211	5,499	5,688,262
31,337,514	54,024	28,643,857	71,880	48,980,102	92,974	48,971,886	99,993	60,611,559
25,238,552	16,441	40,155,445	17,741	50,348,910	25,805	83,237,371	21,454	85,250,734
12,440,000	6,854	15,825,415	4,407	11,336,265	3,813	11,990,000	4,575	13,754,134
37,678,552	23,295	55,980,860	22,148	61,685,175	29,618	95,227,271	26,029	99,004,868
5,677,415	6,646	5,928,219	4,674	5,096,043	2,850	3,340,509	2,415	3,032,242
8,514,223	2,591	882,350	6,312	2,873,373	8,119	4,219,315	3,872	1,981,884
14,191,638	9,237	6,810,569	10,986	7,969,416	10,969	7,559,824	6,287	5,014,126
6,599,280	10,367	9,123,400	10,739	19,629,324	10,130	25,931,674	22,360	26,971,938
			2,901	2,024,910				
26,128,775	5,278	6,222,087	6,082	7,914,808	1,589	2,777,079	954	3,080,739
32,728,055	15,645	15,345,487	19,722	29,569,043	11,719	28,708,753	23,314	30,052,677
4,084,160	3,540	1,919,250	3,953	2,788,925	8,088	6,535,060	10,962	8,215,779
	1,666	9,062,970	854	5,877,300	3	18,000	2,808	19,480,167
10,554,190	3,307	22,204,700	2,113	14,614,320	4,442	32,343,250	3,161	22,605,440
14,638,350	8,513	33,186,920	6,920	23,230,545	12,533	38,896,310	16,931	50,301,386
130,574,109	120,714	139,967,693	131,656	171,434,280	157,813	219,364,144	163,554	244,984,616

表－４ 過去３年間にける水揚げ金額の割合

種類	年度	53	54	55	主 な 魚 種
鮮 魚 類		22 %	25 %	52 %	イカ、タコ、マス、サケ
貝 類		43	40	19	アワビ
海 藻 類		3	2	1	フノリ
製 品 類		13	12	5	干しフノリ、イカナゴ
そ の 他		18	21	23	ウニ（生、塩）

(B) 尻屋漁業研究会員に対する意識のアンケート調査結果

尻屋漁業研究会員（参加23名）に対して漁業振興に関する意識のアンケート調査を実施し、次の結果を得た。

(1) 現在従事している漁業の種類は何か。

順 位	1	2	3	4	5	6	7	8	9
種 類	アワビ	イカ釣	ウニ	サケ定置	タコ	採草	一本釣	刺網	その他

(2) 今後伸ばしたいと思う漁業は何か。

順 位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
種 類	アワビ	サ定 ケ置	ウニ	イカ釣	タコ	ホタテ ガイ	一本釣	海藻 養殖	採草	刺網	その他

(3) 漁業上の問題で最近困っていることは何か。

順 位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
問題点	燃油高	魚価安	資材高	密漁	技術足	資金足	情報足	労力足	県事業足	その他

(4) 尻屋の漁業振興に必要なことは何か。

順 位	事 項
1	アワビの安定生産（密漁防止も含む）
2	サケ定置漁業の振興
3	ホタテガイ地まき漁業の実施
4	ウニ移殖事業の実施
5	マグロなど一本釣の導入
6	大型魚礁の設置
7	新漁業技術の導入
8	役職員の奮起

以上の結果から安定した高い生産が期待されるアワビに最も強い関心があるように思われる。
また新事業としてサケの定置網漁業およびホタテガイの放流にも非常な人気がある。

燃油高、資材高、魚価安などが経営を圧迫していることがわかるが、アワビの密漁などもこれに次ぐ大きな問題として認識される。

その他各種魚類の資源生態、漁具、漁法についても関心があることがわかった。

(C) 現地協議会における協力機関からの要望事項

2回にわたり現地協議会を開催し、協力機関が漁業振興に関する要望事項、意見を聴取し、調整組織に図って解決策を検討した。

- (1) 近年イカナゴの資源が減少しているが、研究機関で調査して欲しい。
- (2) スルメイカは年々回遊してくる量が増加しているようだが、その回遊経路、資源なども調査してもらいたい。
- (3) 沿岸魚類を対象した漁具、漁法の開発も研究機関で検討してもらいたい。
- (4) 近年根付魚の資源が減少しているようだ。今後とも大型魚礁の設置を希望する。
- (5) 産卵場所、稚貝の生息場所、アワビの生息量について把握したいが研究機関で研究会と共に調査に参加し指導して貰いたい。
- (6) アワビの密漁グループが集団化され凶暴化しているので漁協でも苦慮している。磯地帯を昼夜巡回しているが巧妙化しているので県でも対策を考えて欲しい。
- (7) 昭和56年5月、研究会で3～4cmのホタテガイ80万個を放流しているが、タコによる食害、潮流による移動、底質などについても調査方法を指導して欲しい。
- (8) 3～4年位前からコンブが増え始め、去年は急激に繁茂してきている。種類系統を教えてほしい。また海中造林はウニ、アワビの餌料としてその周辺に着生させることを目的にやって来たが、天然コンブが生えて来た現在でも続けるべきかどうか教えて欲しい。
- (9) 尻屋では個人で塩ウニの加工を行なっている。しかし4～8月の気温の高い時期なので悪くなり易いので鮮度保持のよい方法はないか。

56年度は2万本以上のサケの水揚げがあった。今後海産親魚を利用した地元でのふ化放流を考えているが尻屋には川がないのでよい方法はないか教えて欲しい。

(D) 上記要望に対する対応方法

(1) イ カ ナ ゴ

水産試験場で昭和57年度から青森県のイカナゴ資源について調査に入る予定になっている。

(2) ス ル メ イ カ

水産試験場で太平洋を北上するスルメイカの生態、資源について、これまでの資料をもとに指導を行なう予定になっている。

(3) 漁具、漁法の開発

行政規則上は水産試験場の漁業部で行なうことになっているが、情報化の進んでいる現在直接に仕事にたずさわっている漁業者の方が進んでいるむきがある。しかし漁業開発という型で深海のトロール、カゴ漁法などの研究は進めている。

(4) 大型魚礁の設置

大型魚礁については、昭和57年度以降も継続して実施する。また津軽海峡よりに人工礁設置の予定になっている。

(5) アワビ（ウニ）

アワビについては、最近海藻類が増えて来ており、研究するには最適の条件になっている。水産増殖センターでは、ウニも含めて研究会員と共に調査したいと考えている。

(6) 密漁（アワビ）

県では青森県漁場監視団連合会を組織しその配下に各漁協の監視団があり、厳重な監視を行なっているが巧妙化している密漁を絶滅するには至ってない。今後ともこれらの組織の活動に期待する。

(7) ホ タ テ ガ イ

県では外海域のホタテガイ漁場開発には力を入れており事業の補助も行なっている。水産増殖センターも技術面の指導を強力にすすめてゆく考えである。

(8) コ ン ブ

種類についてはマコンブであることは確かである。水産増殖センターでサンプルを調べて系統についても検討したい。海中造林については海藻の繁殖の少ない場所に移動しながら今後とも続けるべきと思われる。

(9) ウ ニ の 加 工

加工法で対応することは困難と思われる。餌の豊富な場所への移殖や海藻林の造成などで身入りを促進させることが望ましい。

(10) サ ケ

ふ化放流に関しては野牛川を対象として未利用河川の調査を行っており、可能性があれば昭和58年度にふ化場の建設を考える。その際尻屋でも協力願いたい。

Ⅳ 総 合 考 察

尻屋の漁業はアワビ、ウニ、フノリなどの磯根漁業と、スルメイカ、イカナゴ、ヒラメ、ブリなどの回遊性のものを対象とした沿岸漁業とに分けられる。

このうち回遊性の種類については、イカ漁のように好、不漁により漁業生産が大きく変動することもある。また一時期は有望視されたイカナゴ漁も昭和53年頃より急激に減少し、漁業者にとっては大きな不安材料になっている。

更に尻屋沖は沖合トロール、巻網漁業と漁場が交錯し、安全操業の面からも大きな問題となっている。このように回遊性の種類を考える場合経営面では不安定な要素が多いのが実情である。一方磯根漁業についてはアワビ、ウニ、フノリなど比較的安定した生産を上げている。

特に明るい希望としては長い間海藻類の成育が見られなかった前沖にコンブが増え始め、2年コンブも出来るようになってきていることである。これは東北水研ならびに青森県が永年検討して来たアワビの海藻類給餌型増殖や海藻林造成事業などの成果によるものと考えられる。

磯入りアワビの量も少なくなり、沖合で大型に成育している傾向が見られ、今後はアワビ、ウニ等の成員生産管理に力を入れてゆくべきであろう。

また昭和56年5月にホタテガイの放流試験を行っているが、地元でのこれにかかる期待は大きい。サケの定置網漁業に対する意欲も盛んなものがある。

これらに取組む組合、研究会の体制も確かなものがあり、調査、研究に対する協力面でも優れている。

今後はアワビ、ウニ、コンブ、フノリなど磯資源の漁場管理を徹底し、加えてホタテガイ、サケなどの栽培漁業の導入を図るべきものと思われる。